

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18320026
研究課題名（和文） 伊藤仁齋・東涯の諸稿本 of 思想史的研究

研究課題名（英文） A Study of the Evolution of the Thought of Ito Jinsai and Togai as Seen in Successive Versions of Their Commentaries

研究代表者
丸谷 晃一（MARUYA KOICHI）
中部大学・人文学部・教授
研究者番号：50279999

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：伊藤仁齋、伊藤東涯、論語古義、古義堂文庫、林本

1. 研究計画の概要

伊藤仁齋は、荻生徂徠と並んで近世日本を代表する儒学者である。この仁齋の諸資料は、天理大学附属天理図書館古義堂文庫に稿本を含めてほぼ完全な形で所蔵されているが、稿本の活字化は実現していない。それが江戸思想史研究の障壁となっている。そこで本研究では、伊藤仁齋の主著とされる『論語古義』の稿本「林本」を活字化し、それに書き下し文、注釈・校異、及び解題をつけることを課題とする。

2. 研究の進捗状況

伊藤仁齋は、儒学の経典の中の『論語』に「最上至極宇宙第一書」というように最大限の評価を与える。この『論語』の仁齋の注釈書が『論語古義』である。この書は、朱子学の『論語集註』への批判書として書かれた。この『論語集註』は、江戸期の『論語』の注釈書の中核をなすものである。しかしながら、この『論語集註』には「理」「気」等の孔子の時代に使用されていない、後代の概念が数多く用いられ、その概念によって孔子の

思想が理解されている。こうしたとらえ方では孔子そのものの思想を理解することは出来ない。仁齋はこのような考えて、朱子学を批判する。そこで後代の概念を排斥し、孔子の時代そのものに立ち戻ろうとする。その解釈学を仁齋は『論語』本来の意味を回復する学、すなわち「古義」学と呼ぶ。そうした意味が仁齋の『論語古義』には込められている。しかしながら『論語』の本来の意味を回復させることは容易なことではない。その試行錯誤を仁齋は繰り返した。そのノートが、仁齋の残した『論語古義』の五種類の稿本（「第二本」「誠修校本」「元禄九年校本」「元禄十六年定本」「林本」）である。仁齋は『論語古義』を生前に公刊することはなかった。仁齋の死後、息子東涯が広範に校訂を加えた稿本が底本とされて『論語古義』は刊行される。東涯は、仁齋学を家学として継承するが、本研究では、仁齋と東涯との間には思想的相異があるという結論に到達した。そこで仁齋生前最後の稿本であり、しかも手書きである「林本」を判読し、それを活字化した。その

活字化したものに第一回目の校正を加える作業を終え、現在、第二回目の校正を加えている段階である。このいわば二校目が最終段階の校正であって、これが完成すれば、伊藤仁齋著『論語古義』が刊行される環境が整うことになる。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

伊藤仁齋著『論語古義』「林本」の活字化の作業において最も困難なのは、仁齋の手書きの稿本を判読し、それを活字化することである。この活字化の作業が実現したので、おおむね順調に進展していると言える。

4. 今後の研究の推進方策

現在の第二回目の校正を完成させ、最終的に研究代表者である丸谷晃一がチェックし、解説を付ければ、出版の準備が完成する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①片岡 龍, “儒教に対する使命感と諦念”『茶山学』11号, p55 - 57, 2007 査読有
- ②中田 喜万, “伊藤仁齋の「義」と「命」—ある反基礎づけ主義の出発—”, 『政治思想史研究』第7号, p91 - 117, 2007 査読有
- ③苅部 直, “「血」と「君徳」”, 『岩波講座憲法 変容する統治システム』第4巻, p53 - 73, 査読有

[学会発表] (計1件)

- ①片岡 龍, “伊藤仁齋における『孟子』”, 第五回日本漢学国際学術検討会, 2008年3月29日, 国立台湾大学文学院演講庁

[図書] (計2件)

- ①苅部 直, 片岡 龍, 『日本思想史ハンドブック』, 新書館, 238ページ, 2008
- ②苅部 直, 『移りゆく教養』, NTT出版, 252ページ, 2007